

「日韓障がい者サッカー交流プログラムを通じた肢体不自由児・者の心と体の育成」事業

サッカーへの参加と心身の成長の機会を提供するために
CPサッカーによる国際交流を実施

日本代表やなでしこジャパンの活躍でサッカー人気が定着した日本だが、サッカー関連のプログラムが数多く用意されている健常児・者に比べ、肢体不自由児・者にはサッカーをする機会がほとんどないのが現状である。そんななか、ジュニア世代から育成する脳性まひ者のクラブチームがある。

CPサッカーの日本における
バイオニアが「エスペランサ」

CPサッカーの「CP」とは「Cerebral Palsy」の略で、「脳性まひ」のこと。CPサッカーは1984年からパラリンピックの正式種目となり、1チーム7人で行うため、日本では「脳性まひ者7人制サッカー」とも呼ばれている。パラリンピックの同種目に出場するためには、世界ランキング8位以内が条件で、日本は現在、13位だという。日本はまだ、この種目でパラリンピックに出場したことがない。

CPサッカーに参加できるのは、杖なしで歩行や走行ができる肢体不自由者(脳性まひ、脳外傷、脳血管障害などによる四肢まひ、片まひ、両まひなど)で、競技として行う場合は、プレーヤーは障がいのタイプや程度により、F T 5、F T 6、F T 7、F T 8の4つのクラスに分けられ、チー

ムは必ず1人以上のF T 5またはF T 6、1人以内のF T 8の競技者で構成することになっている。

現在、日本には、日本脳性麻痺7人制サッカー協会に所属するチームが7チームあるが、そのなかでジュニア年代のカテゴリーを持つのは、神奈川県川崎市を拠点に活動する「エスペランサ」(2012年にNPO法人『CPサッカー&ライフ エスペランサ』に改組)だけである。同法人の理事である神一世子さんは、設立の経緯を次のように語る。

「脳性まひによる軽度の障がいを持っている私の夫が、1996年のアトランタ・パラリンピックの紹介番組でCPサッカーの存在を知り、パラリンピックに出たいということで、知り合いに声をかけてチームを作ったのが、日本におけるCPサッカーの始まりです。2002年にエスペランサを発足させ当初は大人だけのチームでしたが、軽度の障がいを持つ子どもたちがスポーツを楽しめる環境がなかったので、そうした環境を提供したいということと、子どものうちから始めれば技術の向上も速いと考え、2007年にジュニアのカテゴリーを作りました。現在、ジュニア、ユース、一般を合わせると約50名のクラブ員がいます。男子が中心ですが、うちでは女子も受け入れています」



2012年11月に開催した「日韓 CP サッカー エスペランサ大会 2012 in YOKOHAMA」



イベントを告知するチラシ

多くの人と触れ合い、視野を広げる機会にもなる
日韓交流とクリニックを開催

エスペランサでは、一般が週1回、ジュニアが月2回の練習会を基本としているが、さらに2010年からは元プロサッカー選手や指導者の協力を得て、肢体不自由児・者を対象としたサッカー教室の開催、CPサッカー選手の発掘育成強化事業などを行うほか、韓国の脳性まひ障がい者サッカークラブと友好クラブ協定を結び、日韓交流プログラムをスタートさせた。その一環として、2012年11月18日に横浜みなとみらい地区にあるマリノスタウンで、「日韓CPサッカー エスペランサ大会 2012 in YOKOHAMA」を開催。ゲストチームとして韓国から1チームを招いたほか、横浜F・マリノスが運営する知的障がい者のチーム「F・マリノソフトウーロ」、日本各地から選抜された選手で構成されたチーム、エスペランサの4チームによるサッカー大会、およびジュニアを対象としたサッカークリニックを実施したが、このイベントにAJOSCの助成が役立てられた。

「初めての経験ということに加え、大会開催の正式決定が9月だったため、バタバタという感じでした。来年以



今回は韓国からチームを招き、日韓交流の第一歩となった

日韓戦ということもあり、試合は熱戦となった

担当者より



CPサッカーによる
国際交流を進めたい。

エスペランサ
代表
神幸雄さん

これまでは韓国に招かれるだけでしたが、今回、助成をいただいたおかげで、韓国からチームを呼ぶことができ、日韓交流の新たな第一歩になりました。CPサッカーを通じて両国のスポーツ交流をさらに進めると共に、さらに幅広い国際交流につなげていきたいと思っています。今回は、ありがとうございました。

降も続けることができれば、もっとうまく運営できると思います。特に子どもたちにとっては、普段の練習と違い、刺激的で貴重な体験になったようで、積極的に周囲の人たちに声をかける子どももいました。こうした催しは人と触れ合う機会を増やし、視野を広げることにもつながるので、ぜひ継続していきたい。参加者はもとより、保護者の方々からも、よかったという声をたくさんいただきました」

そう話す、神さん。勝つチームを作ることに、普及を目的とした活動は必ずしも方向性が一致しないが、その両方のバランスをうまく取りながら、今後もCPサッカーを通じて、肢体不自由児・者の自立と社会参加を一層、進めていきたいという。「サッカーを始めて、自分に自信が持てるようになった」という声がクラブ員からよく聞かれるというが、その声がエスペランサの活動の有意義さを何よりも雄弁に物語っているように思われる。